

当院におけるクラミジア感染症の実態

山 岸 律 子, 宍 戸 祥 子, 村 口 喜 代
杉 本 憲 宏*

はじめに

近年、性行動の多様化、性の自由化の浸透に伴い、性感染症が新たな社会問題として認識されている。今回は、最近特に注目されてきたクラミジア感染症について、当院においても増加傾向がみられ、若年婦人それも未婚婦人に高率で認められる。クラミジア、トラコマトシスは、子宮頸管炎、子宮付属器炎、骨盤腹膜炎などを惹起し、不妊症の原因となるともいわれている。また妊産婦に感染すれば流早産の原因になるという。しかも婦人科領域のクラミジア感染症は、不顕性感染が多く、症状があっても極めて軽微なため見逃されることが多く、知らぬ間に感染し、他へ伝播してしまう危れが多いため、スクリーニングの重要性が指摘される。

対象および方法

調査対象は、1986年9月から1990年5月までの間に帯下、腹痛などを主訴として訪れた患者を対象として、病歴から得られた情報を分析、検討した。検査方法は、患者の子宮頸管内分泌物を、綿棒で採取し、クラミジアザイム法にて検査、反応陽性者をクラミジア感染者とみなした。

調査結果

1. 年度別対象者数 (図1)

年度別対象者数は1987年244人、1988年337人と年々増加し全期間で1,340人であった。うちクラミジア検査陽性者は163人で、感染率は12.1%であった。

2. 年齢階級別頻度 (図2)

クラミジア検査陽性者163人について、年齢階級別感染率をみると、15歳から19歳の10代若年者では116人で、うち28人が陽性、24.3%と極めて高率であった。20歳から24歳では、62人で17.9%の感染率でやや高く、25歳から29歳では10.7%、30歳代では4.2%と年齢が進むにつれて減少傾向がみられた。しかし40歳代では12.7%と再び増加を示したのが注目された。50歳代では30歳代と同様の4.2%を示した。

図1. 年度別対象者数

1986年(9~12月)	55人
1987	244
1988	337
1889	419
1990 (1~5月)	285

計1,340人

クラミジア感染率 12.1%

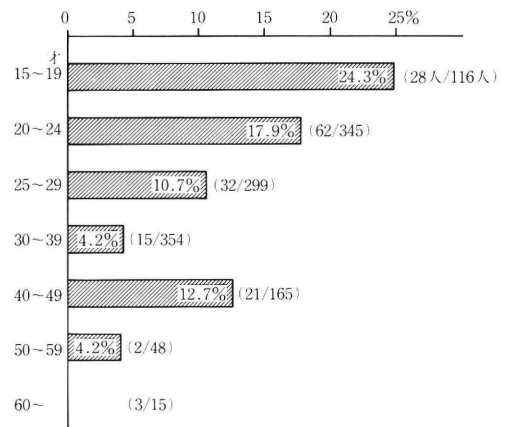


図2. クラミジア感染症 (163名)
(年齢階級別頻度)

仙台市立病院産婦人科

* 同 中央臨床検査室

図3. クラミジア感染症
(未婚・既婚者別頻度)―1988～1990年―

	平均年齢	対象者数	感染者数	感染率
未婚者	23.6歳	475人	81人	17.0%
既婚者	36.4	517	34	6.5
不明		34		
		1,026人	115人	11.2%

図6. 合併症と再発状況
他のSTD感染の状況

トリコモナス	5人
性器ヘルペス	4
コンジローマ	1

クラミジア感染症再発例

2回	3人
3回	1

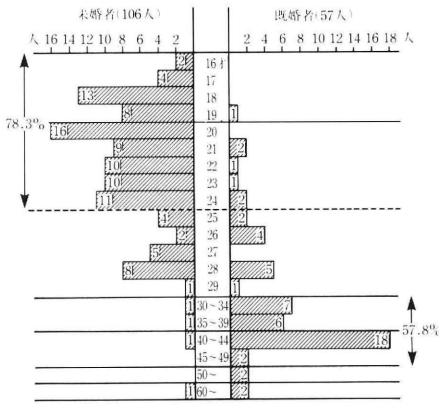


図4. クラミジア感染症患者の年齢分布

3. 未婚，既婚者別頻度 (図3)

今回の対象期間の中で、1988年以降についてのみ、未婚、既婚者別に感染率を調べたものである。未婚対象者の平均年齢は23.6歳で、既婚者では36.4歳であった。未婚者の対象者数は475人、うち81人が感染しており17.0%で高い感染率を示している。既婚者では517人うち、34人で6.5%であった。未婚者は既婚者のほぼ3倍の感染率を示し、従来の報告と一致した結果が得られた。

4. クラミジア陽性者の年齢分布 (図4)

年齢別に未婚、既婚者別に調べた。未婚者は106人中うち、10代が27人陽性である。18歳では13人と増加、19歳では8人と減少している。高校卒業前後の年齢から急増の傾向がみられた。20歳から24歳では56人で、10代から24歳までで未婚者の78.3%とほぼ8割の高い感染率を示した。既婚者では10代20代とも少数である。30歳から34歳では57人中7名、35歳から39歳では6人とほぼ同数である。40代では前半に18人と増加、30代と40代を合せて57.8%の感染率であった。

5. クラミジア感染症患者の職業別分類 (図5)

感染者について、本人の問診票記載による職業より分類してみた。未婚者の10代では学生が多く、20代前半では会社員と学生が突出して多いのが注目された。20代後半においても会社員に多く感染が認められた。未婚者では学生と会社員で66.6%とほぼ7割を示した。既婚者では各年齢層一様に主婦に多く認められた。

6. 合併症と再発状況

他の性感染症を合併するものについて調べた。

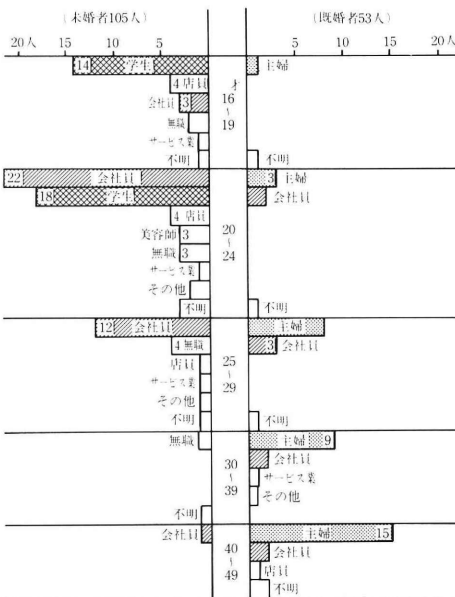


図5. クラミジア感染症患者の職業別分類

トリコモナス膣炎が5人、性器ヘルペス4人、尖型コンジローマ1人であった。カンジタ膣炎の合併はかなり多く今回の調査項目より除外した。クラミジア感染の再発例は2回の者が3人、3回の者が1人であった。

7. 症例 I

患者: 28歳, 未婚, 家事手伝い。

主訴: 帯下感。

経過: 平成元年1月28日初診。人工妊娠中絶2回の既往あり, パートナーが尿道炎で泌尿器科で加療中。初診時クラミジア感染を認め, テトラサイクリン系製剤ミノマイシンを服用。同年8月15日再度受診し再発を確認するも来院せず, 未治療のまま経過。翌年1月再び来院。改めてクラミジア感染を確認し治療した。パートナーが次々と変わるという背景の中で, 再発を繰り返したと思われる症例である。

8. 症例 II

患者: 60歳, 主婦。内縁関係のパートナー54歳, 飲食店勤務。

主訴: 帯下感。

経過: 平成2年1月8日初診。老人性膣炎と診断され, 2カ月間漢方薬服用。しかし, いっこうに軽快せず, 同年3月5日初めてクラミジア検査を実施し, 感染が確認された。パートナーと共にミノマイシン服用し治癒した。高齢者においても, クラミジア感染を疑って検査する必要性を痛感した症例であった。

考 察

昨今は, 性風俗の蔓延, 性の自由化の風潮は増々

進行しており, 産婦人科医療の現場よりみると, 未婚者におけるセックスパートナーの複数化, 重複化傾向は今や一般化しつつあるとの感を強くする。今回, 未婚者特に10代から20代前半の者にクラミジア感染を高頻度で認めたことは, 現在の社会状況の中で憂慮されてきた問題の一端を浮き彫りにしたと言えよう。特にクラミジア感染症が風俗, 接客業などの特殊な職業の者ではなく, 学生, OLに突出して多かったことを考えると, 性感染症のすそ野は広く, 一般家庭を含む社会全般に蔓延しつつあることを裏付けている。また既婚者においてはクラミジア感染は結婚後しばらくは減少傾向を示すものの, 一般に子育てから解放される40代に再び増加に転じており, この時期より夫婦関係の危機, 不安定化が顕在化すると思われる。性感染症は未婚者のみならず, 婚姻関係にある男女間にも波及しており, 一人一人が真剣に考えるべき時に来ていると言える。感染予防の面では, 積極的な検査を受け, 早期発見, 治療に努めるよう啓蒙活動が大切である。医療に携さわる者は身近な人々への働きかけを忘れてはならないと思う。

文 献

- 1) 熊本悦明, 島田 馨, 川名 尚: 性と感染(STD)一性感染症学, 41-57.
- 2) 松田静治: STDと母子感染, 人間と性シリーズ⑥.
- 3) 岩倉弘毅, 古市賢一, 鈴木 歩: 最近の思春期女性性のクラミジア感染, 思春期学8, 1990.